

善導浄土教の人間觀にみる大乘仏教的原理

河 智 義 邦

善導の人間觀の特色を鑑みる場合、様々な視点からの指摘

が可能であると考えられるが、その厳しい人間把握・自己把握は『觀經疏』『散善義』（以下『散善義』）に明かされる三心積の文言に集約されていると言える。他の著述の中にも展開されるところであるが、諸所に生死流轉の凡夫相について繰り返し克明に描写するのである。

・ 決定深信 自身現是罪惡生死凡夫 曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣

これはどこまでも仏道（念仏）実践における「信心」の体験的世界の中で示された表現と言える。善導は時間的・空間的に『現』とという一点において、ここにある自己と、あるべき自己との矛盾・相克に苦悩し、人間（自身）が離れることのできない根源的罪惡に目覺め悲嘆し、その二律背反の悲嘆は真摯な「懺悔」を生み出す契機となっていくのである。

・ 上品懺悔者身毛孔中血流眼中血出者名上品懺悔 中品懺悔者遍身熱汗從毛孔出眼中血流者名中品懺悔 下品懺悔者遍身微熱眼

中涙出者名下品懺悔

善導の著述の中には一人称の形で自己の罪惡性を述懐する箇所が多く、殊に「回向発願釈」に喩説される二河譬の中の群賊惡獸や貪瞋二河も善導自身の内奥の発露であり、ここに「單獨者」善導の宗教的実存としての主体的な信仰告白が顯著に窺えるのである。またその一方、『散善義』の「二明善解大乘空義 或聽聞諸法一切皆空 生死無為亦空凡聖明闇亦空世間六道出世間 三賢十聖等若望其体性畢竟不二 雖聞此說其心担不生疑滯也」の文に窺知されるように「生仏一如」の原理を見いだすことができる。善導の人間觀の根底には大乘仏教的原理である空思想が連綿と流れているのであり、特に善導浄土教の思想的根柢として『觀經疏』『玄義分』（以下『玄義分』）序題門前半の記述に表れる如来藏緣起論・真如緣起論系の思想に焦点を当ててみたい。

小論においては、善導の人間觀の根底にある大乘仏教的原理（空思想）、即ち生仏一如思想に起因する「仏性」の問題に

ついで考究することにより、その本来的意義と「仏性論」の浄土教の原型ともいえるべき構造を明らかにしてみたいと思う。このことは仏教思想史上における浄土教の思想史的定位を考えるうえにおいても重要なことと考えられる。

「序題門」冒頭には、

(a) 竊以真如廣大五乘不測其辺法性深高十聖莫窮其際真如之体量量性不出蠢蠢之心法性無辺辺体則元來不動

(一) 内筆者挿入

(b) 無塵法界凡聖齊円両垢如則普該於含識恒沙功德寂用湛然

(c) 但以垢障覆深淨体無由顯照故(中略)漸頓則各称所宜随

縁者則皆蒙解脫

とあり、ここに、真如・法性と衆生心の「不一不異の不一性」に重心をおく善導の仏性論・仏道観の出発点、根本意趣が示されるのである。

さて、所謂「如来蔵三部経」(『如来蔵経』『不増不减経』『勝鬘経』)の中、『如来蔵経』には、①煩惱所纏の衆生のうちに如来智、如来眼を見えた如来が端座している。②如来はその汚れなき如来の法性を觀察して我身と相似していると言う。③そして法を説いて内なる如来を浄化させ如来のはたらきを顕しめる。④この「一切衆生が如来を蔵している」ということは普遍妥当な真理であり、如来が出世しなくても常に変わりない。という義が説かれており、その如来蔵思想を組織

善導浄土教の人間観にみる大乘仏教の原理(河智)

化した書と言われる『宝性論』には、次のように如来蔵の三義を明かす。

(1) 如来の法身が遍満していること(2) 如来の真如が無差別であること(3) 如来の種性があること

この如来蔵三義は一見したところ従因向果のようであるが実は従果向因の性質を有するもので、衆生が菩提心をもち衆生が如来蔵であるということは、如来の側からののはたらきかけである如来の慈悲業が衆生に及んでいるということであり、一般的に如来蔵思想の目指すところは如来の慈悲業としての衆生救済の働きを顕すものと見なされる。そこで上の三義を「序題門」や、さらには『仏性論』と対比すると、『宝性論』(1) 法身遍満は、「序題門」(a) の段、『仏性論』所撰蔵の義、(2) 真如無差別は、(b) の段、能撰蔵の義と、そして(3) 如来有種性は、(c) の段、隱覆蔵の義と同意趣のものと把握される。ここに善導の序題門前半の文に内包される深い思想的背景が知られ、「序題門」は如来蔵という術語を用いてはいないが、その内容は如来蔵義に他ならないと考えられるのである。従って、衆生心中の真如即ち仏性の固定的実体的見方は否定され、仏性(如来蔵)は如来の慈悲業(はたらき)を通して開顯されるべきものという性質が含まれていて、衆生界においては動的な仏道実践の場において体認され語られるべき論理として明かされる。(つまり、空性

を通して知られる世界が「仏性有り」という世界で、実体的なアニミズム的な自然神秘思想、万物神秘思想といわれるものとは区別される。）

このように、善導の教学的素養の中に如来藏思想を思わせるものがあつたことは上記の対比や「序題門」の表現から十分に認識され、善導の仏性論を思考するうえの一つの要素になるものと思われる。（より本質的には『涅槃經』『大乘起信論』との關係考）

さらに善導の仏性論についての記述を窺うと、『法事讃』には、真如・法性のことを仏性と名付けて、「不知身中有如来仏性障」と明かされ、『往生礼讃』には「法性無辺、我等作罪亦復無辺」（中略）唯仏与仏乃能知我罪之多少」とあるように、善導は一切衆生に本具の仏性を認めつつ、仏の知見によって信知される自己の潜在的暗黒性ともいへべき罪業性に、或いは時代的（末法）危機的状況に目覚めることによつて、仏凡の「不一不異の不一性」に重点を置く浄土教の立場を鮮明にするのである。このことは『般舟讃』に

・ 卻推受生之無際與空性同時時而有心識 若不與空界同時有一
一切衆生即是無因而始出也心識若無本因有者即事同木石 若同木
石者則無六道之因業也因業若無者凡聖苦樂因果誰覺誰知也 以
斯道理推勸者一切衆生定有心識也 若有心識即與空際同時有有
若與空際同時有者即唯仏與仏得知本元也 行者等知自身心與空

際同時有乃至今身今日不能斷惡除貪 一切煩惱唯覺增多

と示され、一切衆生には真如と同時存在する無始以来の心識があつて、それは真如と一ならず異に非ざるものといふことができる。それゆえに、その初起の本源は衆生の窮めることのできる限界を超え「唯仏與仏の知見」であると示される。

また『宝性論』には、如来藏の自覚は極めて難解で如来のみの行境であり、それゆえに衆生は如来の言葉を実実として信解することよりほかには方法はないとされ、信の重要性が強調される。『般舟讃』の文も構造的には「序題門」の記述と同じで、善導は（絶対現在の）《今》、ここに在る自身の相を見過ぐす事なく、信心に基づいた念仏実践を自ら修し他にも勧め、体験的浄土教的に上記の如来藏思想・真如思想を唱へたものと思われる。

ここに浄土教において仏性論を考えていく場合の原型とも言うべき構造が窺われ、この構造が「二種深信」の理論根拠になるものと忖度できるのである。

〈キーワード〉 善導、如来藏思想、仏性

（龍谷大学大学院）